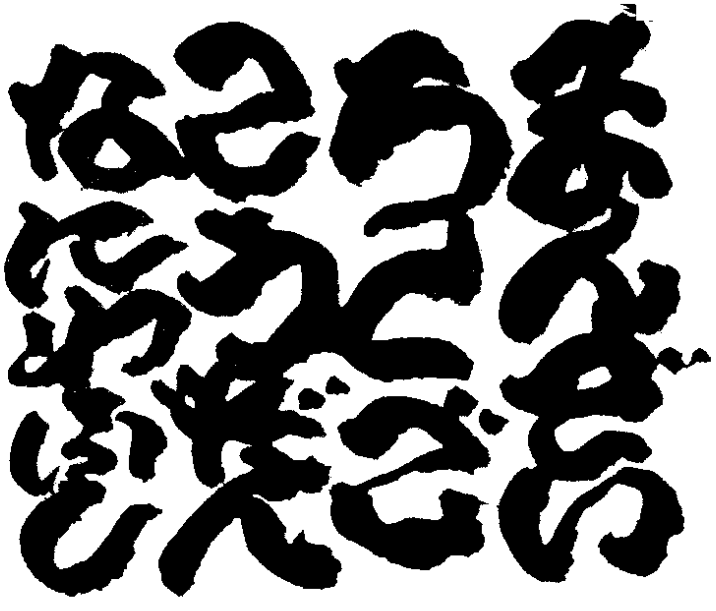
贋芸人抄

藤本義一

藤本義一
贋芸人抄



文藝春秋

贋芸人抄

昭和四十六年十月三十日　第一刷

定価　六〇〇円

著者　藤本義一

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

電話東京二六五局一二一一

郵便番号一〇二

印刷　図書印刷

製本　加藤製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1971 Giichi Fujimoto　Printed in Japan

0093-302120-7384

目次

マンハッタン・ブルース　3
火の華　67
骨を拾う　129
贋芸人抄　179
ライオン　239
あとがき　276

装幀　村上　豊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マンハッタン・ブルース

一

黄昏(たそがれ)になるとハドソン川の泥と潮の匂いが強くなる。夏の六月から九月にかけては、この蒸れた匂いがマンハッタンを覆って三時間は立去ろうとしない。鼻腔から喉の奥までが乾き、唾液を呑み込むたびに泥の塊が胃の腑に陥ち込んでいくようだ。

「君は日本人かね」

八番街四十二丁目のバス・ターミナルでおれは不意に日本語で話しかけられた。時には日本の観光客相手のガイドで稼ぐのだから、日本語を奇異に感じたりはしないのだが、街角で不意に話しかけられた日本語は二年余りの生活ではじめてといってよかった。

「ああ」

おれは懶(ものう)く答えて、男に胡乱(うろんげ)気な眼差をやった。男はよれよれのレインコートの襟を立て、埃と汗の臭気にうんざりした表情で持物らしいものはない。

「留学生か」

「ああ」

おれと男は互いに相手の素性を認めようとするのではなく、互いに疑いの視線を交し合って、

暫く佇(たたず)んでいた。風は死んでいた。おれはYMCAの場所でも聞くつもりだろうと考えた。荒っぽく交錯する轍(わだち)が二人の間にあった。だが、その男が、おれのような留学生くずれではないと考えられる点はいくつか確かめられた。絶望らしいものもないし、埃や砂にまみれた虚脱感も窺(うかが)えない。疲労は感じとられたが、それは生活の疲れではなく、まさしく旅の疲れだった。おれにいつの間にかそんな嗅覚が棲みついていた。

「なにを専攻しているんだね」

男のぶっきら棒な質問におれはむっとした。おれは自分の背恰好とか容貌を云々された気分になった。疲れて目蓋だけがいつも赧(あか)いおれをグリニッチ・ヴィレッジの仲間たちは「眼鏡猿」という。だが、奴等にいくら嘲笑されても、気にならない。どこかで愛情に繋がっているからだ。この男にはそれがない。

「史学だ」

おれは出鱈目をいった。どんな嘘八百だってこの男の毒にならないだろう。

「バワリー・ストリートっていうところは広いのか」

「広いね」

おれは警戒の姿勢をとった。この男はおれを尾行して来たのではないかという疑念が湧いた。移民局からやって来たのではないか。国外追放になっているおれの身分を嗅ぎつけたのではないだろうか。おれは慌てて、次の嘘をつくり出そうとした。史学をさらに突っ込んできたなら、誰か適当な人名を挙げて伝記の編纂とでもいおうか。進捗状態を訊かれたなら、現在は資料の蒐集

段階でやむなく中断しているとでもいおうか。
「バワリー・ストリートが広いといっても限界があるだろう」
「ああ」
おれは喉の乾きを訴える調子で男を見た。この男はおれの棲家を知っていながら遠まわしに輪を締めてくる気配がある。バワリー・ストリートと少し外れたスプリング・ストリートの安アパートで黒人のトランペッターと同居している事実を摑んでいるのかもしれない。
「ぼくは、たった今、シカゴからバスで来たんだが……」
おれの緊張はつづいた。安心させて一挙に罠にかけようという魂胆かもわからないのだ。USエア・フォースの青いトラックが鎖を引きずって走り去った。男は乾いた唇を頻りに舐め、唾を呑み込んだ。警戒するにあたらないな、こいつは本当にシカゴからバスでやって来たのかもわからない。この土地に慣れていないようだ。馬鈴薯と人蔘を積んだ手押車が二人の間を通り抜けた。ミルクの紙箱を抱いた少年が駆け、新聞売りの少年が伏目がちに過ぎ、黄昏は確実な足取りでやって来た。おれたちは長い時間沈黙で相手の正体を把えようと苛立っているかのようだったが、実際は、ほんの短い時間だったのだろう。
「苦学生のようだな」
男の口調に柔かさがあった。同情を示したつもりなのかと腹立ち気分になったが、おれは相変らず、ああと答えただけで間をもった。おれは無意識の裡に、手に付いた黄と緑のカラー・インクを爪で剥がしていた。デニムのズボンにも、丸首の黒シャツにもポスター絵具が付き、乾いて

いた。五セントの白銅貨を宙に投げながら黒い少年が敏捷な動物の身のこなしで二人の間を縫った。

「人間臭い町だなあ」

男は煙草を咥えた。つい、この間までは三十二セントの煙草だった。

「ああ、人間臭い町だ。むんむんした町だ」

話の結末は一体どこへ向っているのだろう。日本でこういった対話があるだろうかと、不図おれは考えた。

「バワリーで人を探すんだが、どうしたものだろうか」

明らかに困惑の表情といえた。なんの予備知識もなく迷い込んだ風景の中で、これから先の自分を占っているかのようだ。男の視線は向う側の舗道を彷徨って、ホット・ドッグの看板でとまる。横切りにされた巨きなパンの上下に歯が並び、真赤なウィンナーを咥えている図だ。HERE YOU'LL ENJOY HOT DOG!! 食欲の湧く絵柄ではない。ただ、この界隈に似つかわしいというだけである。

「人を探すって……日本人か」

「そう、女なんだ。旧姓は小林ケイコ、ケイは土が重なった圭だ。子は子供の子……」

「小林圭子……留学生なのか」

「いや、戦争花嫁っていうのかな。そういういい方は古いかもしれないが、彼女の郷里ではそんないい方をしていたな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「郷里……」
「裏日本だがね」
それ以上、おれになんの関係もない一人の女を穿鑿する必要なんぞないだろう。
「バワリーには日本人も中国人もいる。一人を探すのは容易いようでいて、とても難しいだろうな」
おれは自分の口調に謳うような響きが宿ったと思った。久しぶりに優者の立場にいる己を知った。相手の途方に暮れた表情を眺めるのもなかなか愉快なものだ。
「難しいだろうか」
「ああ、難しいだろうな。日本人でいながら、日本人でないっていうのが随分多いからな。髪を染めてアイ・シャドウを塗れば、何処の国の女だかわからなくなる」
東洋人なら、どう化けようとしても所詮無理なのだが、おれは男を揶揄いたい気持だった。
「なにか食おうか」
男はおれを誘った。今夜の飢えはこいつで賄ってやろう。さもしい根性が頭を擡げた。
「二十五セントあればホット・ドッグと珈琲にありつけるだろう」
男はレインコートの裾を躱して向い側に大股に歩き出した。正直なところ、おれはがっかりした。この男も文無しなのだ。入口のカウンターに栗色の髪を短く刈上げた少女が突立っていた。愛想笑いひとつするでもなく、少女は二人が入ったのを無視したかのように憑霊中という表情であった。男は腕を通さずにビニールのコートを羽織った女の横に片肱をついて、珈琲とドッグを

注文した。上手な英語とはいえない。皮膚を脂粉で蔽った女がこちらを見た。唇の端に生玉子の黄身が今にも糸をひきそうだった。おれは女の腰から股への漲った部分に一瞥をやり、視線を男に戻した。コックは無造作に掌に一個のコッペパンをのせ、鋭利なナイフで横一文字に切りひらき、中に細いウィンナーと生玉葱のスライスを並べ、片手で玉子を割って落し込んだ。看板のウィンナーとは較べものにならない貧弱さである。

男は貪り食った。生玉子の白身の部分がコートの襟縁にかかっても拭おうとはしない。喉仏が異様な突起物となって上下を繰り返した。後の席で意味をなさない罵言が起ったので振り向くと、アル中らしい男が椅子から崩れ落ちたところだった。少女もコックも無関心を装った。この界隈で平静な歩度はかえって異常なのだ。店内に光が点いた。裸電球が一束となって一瞬先は頡頏し、また分れ、奇妙なことに客の姿は影絵となり、隣りの男の表情さえも掴み難いものになった。入口から淡紅色のジョーゼットのマフラーを巻いた女が入って来るのだけが鮮かに眼を射た。おれはこの町の長い住人のように、緩りと食った。がつがつしていないんだと虚勢を張りたかった。

「この女なんだがね」

男は珈琲を啜りながら、胸ポケットから一葉の顔写真を取り出した。ややセピア色に変じて、二、三の折り皺の入った中の女は、誰に対してかわからないが、なんとなくすまなそうな顔で正面を向いている。全体の表情から、肩、胸にと眺めると、貧しさが漂い出る感じで、発育不全の女学生といった印象が強い。

「昭和三十年の正月に写したものだ。この時、小林圭子は二十三歳だった」

男は物語を暗誦(そら)んじる口調で囁いた。すると、今は三十八、九になる。正月に撮(うつ)したという通り、晴着らしいのをつつましく纏い、眼は怯えというか防禦の様子を湛えている。小動物のそれに似ていた。不思議と律儀さや潔癖さが感じられず、自尊心そのものを喪ってしまった風情に思われた。かといって崩れがモロに感じられるといった調子でもない。淋しさが屈折して自分の胸を射るという表情なのだ。おれ自身の肖像ではないのか。おれは卓上の汚物を布片で拭う仕種(しぐさ)で、写真を男の方に押しやった。そのお返しの恰好で、男は名刺を寄こせてきた。一枚の名刺におれは敵愾心じみた感情を抱いた。おれ自身を名乗るのは危険なのだ。丸い淡い光の暈(かさ)に包まれたかのように一枚の名刺が眩しく映った。名前を聞いたこともない東京の出版社の活字が並び、ノン・フィクション編集部の活字の下に、織田某の字が見えた。

「ぼくは古川ですが……」

勿論のこと偽名であった。本名を名乗る勇気がまだやって来ないのだ。偽名を一旦口にしたからには、こいつとの付合いはどんなことがあろうと偽名を押し通さなければならないなと奇妙な義務感をもった。

「この女を追っかけて来たんだ。サンフランシスコ、シカゴ、そして此処へ……」

「ほう」

「疲れたよ」

男は目蓋を拇指の先で押し、首を振った。

「取材でね」

「そう、取材でね。日数も旅費も尽きたよ。女の方は転々と場所を変更しているんでね」
「それほど魅力のある女なのかね」
おれは卓の上に貼りついたようになっている写真に眼をやった。女の顔は平板に見えたが、怯えの表情がそれだけに強く映った。急に嫩葉(わかば)の新鮮な匂いが鼻をついた。少女がセロリの束を瓶の中に無造作に投げ込んだのだ。これを合図に珈琲をアルコール類に切り換えるのだ。
「この女には、今年十九歳になる子供がいるんだがね……」
混血児だという。白人の米兵との間に産まれたのを実家に預け、黒人と結婚した。その黒人も軍籍にあったのだ。今の亭主は、おそらくその黒人だろうと男はいった。
「白の方は戦死したんだな。朝鮮戦争で……」
「親さがしって企画なのかな」
おれは皮肉たっぷりにいった。だが、疲れている男は、おれの言葉を皮肉とも諧謔とも解さなかった。
「そう、一口にいってしまえば……。だ、が、ここまで追いつめて来たからには、単なる一昔前に流行(はや)った親さがしではないんだ。十九の子供は神奈川と東京で四人の主婦殺しをやってのけたんだ」
「殺人(マーダー)……」
興味をもったおれの口からは、サッジンという言葉が出なかった。悲しんでいいのか。それとも肌に貼りついた米国に誇りをもてばいいのだろうか。ま、そいつは後で考えようと打消し、少

年の犯罪がどういう方法で行なわれたかを訊いた。
「扼殺が一人、後は絞殺なんだがね……」
少年には、他に暴行、傷害、贓物、故買の犯歴が過去にあるという。が、一カ月の裡に四人を殺害したのだ。男は少年の写真を取出した。少年の眼にも怯えがあったが、髪が額にかかり、まだ稚い影が唇のあたりに感じられた。典型的な早発犯罪者の顔とは思われなかった。残酷な容貌なら、マンハッタンに数え切れないぐらいいる。あれらに較べれば、少年の面影は端麗な哀愁を漂わせている。上半身しか窺えないが、肩幅から推察して均斉のとれた体格だろう。こいつが女を殺す場合は、美とも呼べる凄みを増すのではなかろうかと、おれは考えた。おれは奇妙なことに、この少年にもおれ自身の影を見た。自己抑圧と自己挫折が交互に襲ってくるおれ自身の日常に似ている。少年の写真を乱暴に押し返したのも、そんな不安感から解放されたい気持があったからだ。男は水で貼り付いた女の写真を垢の爪で剥ぎ、少年の写真を重ねて内ポケットに入れた。
「女は子供の犯罪を知っているのかなあ」
おれは連邦警察から女の許に連絡がいっていると思いながらも、聞き質したかった。
「知っているようだなあ。地元の記者たちの何人かは女を追った筈だが、その時は、彼女はサンフランシスコにいたんだ」
店は混雑してきた。トラック運転手が入り込み、黒い少年が真鍮の支えに飛びつき、三流のショー・ダンサーが舞台の興奮をそのまま引きずって来たかのように阿諛をとばし、道化を披瀝して少女の機嫌をとった。おれはこういった光景に無縁な一人の見物人であったが、男の持って来

た事実には、野次馬的な触手を伸ばしはじめていた。日本人に偶然出会って、日本語で話し合い、日本人の一人に興味を抱くなどという経験はかつてないことであった。男は、バーボンをオン・ザ・ロックスで注文すると、おれに同意を求める眼差を向けた。おれは頷いた。二人の間に、なんの対話も約束もないのに、おれは頷いてしまったのだ。バワリー・ストリートの、吐瀉物と腋臭の何処かに女が息を殺している様子が想像出来た。

「君、ぼくは、明日にでも帰らなければならないんだ」

帰る。帰らなければならない。なんという贅沢な話だろうか。おれも旅費さえあれば、日本に目的さえはっきりあれば、帰りたいのだ。男にとっては絶望的な「帰らなければならない」という日本語も、おれの場合は希望的な「帰らなければならない」と聞えるのだ。故の知れない、焦りがおれの胸を噛んだ。

「それで……」

おれはグラスの中の不透明な氷を鳴らしながら、つとめて鷹揚な構えを見せた。

「実は……」

男は往復の旅費を自身で調達してやって来たのだといった。出版社には、一カ月の休職を申し出て来たという。そこで、彼は女に会ったルポ原稿を出版社に売る契約をとって来たのだ。

「帰れば旅費の返済もあるし……。かといって、これ以上追跡するのは無理というものだし……」

「こっちがやれば一番いいのだろう」

「そ、そう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com